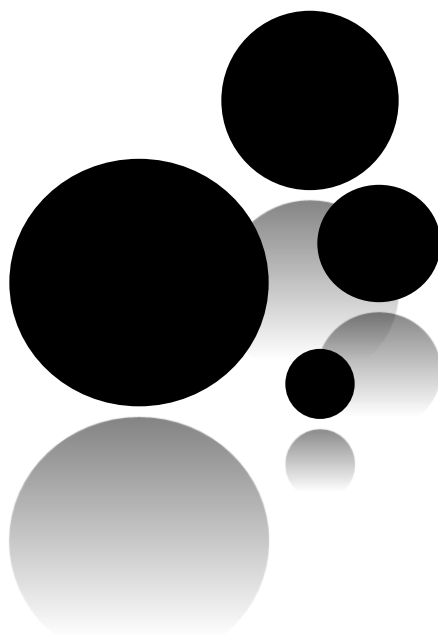


2021 夏 税理士オープンセミナー

【科目別攻略セミナー】

財務諸表論



**各コース初回講義を無料で体験受講できます。
開講日に、各校受付へ直接お越しください(予約不要)。**

※ コースの開講日につきましては、「税理士パンフレット」をご覧ください。

TAC税理士講座

目 次

ページ

テーマ1 科目の特徴 1～2

テーマ2 本試験の傾向と対策 3～4

テーマ3 9月入学コースの紹介 5

テーマ 1

科目の特徴

1 学習内容

財務諸表論という学問は、企業を取り巻く各種の利害関係者（主として投資者や債権者）に対して企業の経営活動の内容とその結果を報告するために、企業活動における各種の取引を記録にとどめ、定期的にこれを取りまとめて財務諸表（貸借対照表や損益計算書等）が作成されるまでの各段階における考え方を研究し、そこから一定の約束事を創りあげてをねらいとする学問である。

	特 徴
理論の学習	理論の出題は、会計理論を中心に行われる。 具体的には、「なぜ減価償却を行う必要があるのか?」「引当金とはなにか?」といった具合に、普段計算で行っている会計処理の理論的背景などが問題として出題される。したがって、理論の学習においては、会計処理等の考え方を理解していくことが重要となる。
計算の学習	計算の出題は、株主等に提出するための財務諸表を作成させる総合問題（決算整理型の総合問題）が出題されている。 特に税理士試験では、「会社法」及び「会社計算規則」の規定に準拠した財務諸表の作成問題を中心に出題されるため、計算の学習においては「会社法」及び「会社計算規則」といった法律や規則に定める様々な約束事をマスターしていくことが重要となる。

なお、理論の学習については、暗記の負担を最小限に抑えて、内容の理解を最優先に考えた学習内容としています。

- ① 理論テキストでは、「文章として暗記しなければならない部分」と「理解中心でよい部分」とを明確に区別しており、理論の暗記負担を軽減しています。
- ② 理論テキスト以外に、本試験の出題傾向に対応するため、穴埋問題、選択問題、〇×問題などの理解を確認するための教材（ポイントチェック）を導入しています。

2 簿記論・財務諸表論の同時学習について

簿記論と財務諸表論（計算）では、会計処理（仕訳）の部分が重複しているため、簿記論と財務諸表論を同時に学習することで、以下のような相乗効果を期待することができます。

- ① 簿記論と財務諸表論（計算）のトレーニング（問題集）には、類似した問題も収録されているため、学習の負担を軽減（特に復習時間を短縮）させることができる。
- ② 同一の論点について、各科目の特性に応じた講義を受けることができるため、多角的に学習することができ、理解が深まりやすい。
- ③ 財務諸表論（理論）では、会計処理の根拠や考え方を学習するため、簿記論の学習においても理解に基づいた学習を行うことができる。

なお、簿記論と財務諸表論のどちらか一方の学習を検討されている場合は、簿記論からの学習をお勧めしております。



参 考 「勘定科目」と「表示科目」

簿記論と財務諸表論（計算）では、会計処理（仕訳）の部分が重複しているが、財務諸表論では、外部報告用の貸借対照表や損益計算書を作成することとなるため、勘定科目ではなく表示科目を用いて解答（表示）することとなる（勘定科目とは、仕訳や勘定記入の際に用いられる科目であり、表示科目とは、貸借対照表や損益計算書に記載する際に用いられる科目である。）。

よって、財務諸表論においては、貸借対照表や損益計算書に記載される表示科目を確実にマスターすることが重要となる。勘定科目と表示科目の関係には、次の2つのパターンがある。

(1) 勘定科目であり、かつ、表示科目でもあるもの

(例)	《勘定科目》	《表示科目》
	受取手形	→ 受取手形
	買掛金	→ 買掛金

(2) 勘定科目と表示科目が異なるもの

(例)	《勘定科目》	《表示科目》
	当座預金	→ 現金及び預金
	貸付金	→ 短期貸付金／長期貸付金

テーマ 2

本試験の傾向と対策

1 受験者数・合格者数・合格率の推移

	平成28年 (第66回)	平成29年 (第67回)	平成30年 (第68回)	令和元年 (第69回)	令和2年 (第70回)
受験者数	11,420人	10,424人	8,817人	9,268人	8,568人
合格者数	1,749人	3,081人	1,179人	1,753人	1,630人
合格率	15.3%	29.6%	13.4%	18.9%	19.0%

2 出題傾向・難易度（合格ライン）・ボリューム

設 問	配 点	特 徴
第一問 (理論)	25点	・会計処理や表示方法の考え方や制度会計上の取扱いに関する穴埋問題、記号選択問題、論述問題などが出題されている。 ・出題論点は、企業会計原則などの伝統的なテーマから、金融基準や包括利益表示基準などの新しいテーマまで多岐にわたっている。
第二問 (理論)	25点	・難易度の高い問題が出題される傾向にある。合格ラインは年によって若干異なるが、概ね12～16点（25点満点中）を推移している。
第三問 (計算)	50点	・株主等に提出するための財務諸表（主に貸借対照表及び損益計算書）を作成させる総合問題（決算整理型の総合問題）が出題されており、オーソドックスなものが出題されることが多い。 ・ボリュームもそこまで多くなく、比較的解きやすいレベルの問題が出題される傾向にある。合格ラインは35点前後（50点満点中）を推移している。

3 学習上のポイント

1 理論問題

(1) 言葉に慣れる

財務諸表論の理論では、会計学独特の言葉や表現が多く出てくる。理論問題では、この会計学独特の言葉や表現を用いて解答を論述しなければならない。そのためにもまず会計学独特の言葉や表現に慣れることが重要になる。

このためには、通勤、通学の時間など隙間の時間を利用し、テキストの文章に数多く目を通すことが必要である。目を通す回数が増えるにつれ、不思議と言葉や表現に対する抵抗感も薄れていくようになる。

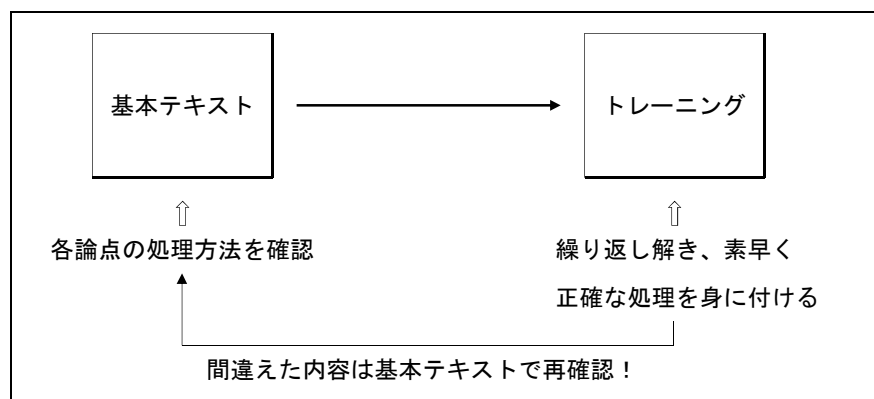
(2) 内容を理解する

理論問題は各論点の「考え方」の理解が問われるため、単なる暗記だけでは正確な解答を論述することができない場合もある。

このためには、講義での説明内容をしっかりと聴き、また、テキストの詳解部分、留意点部分を熟読することにより、各論点の背景にある考え方の理解に努めることが重要である。

2 計算問題

計算問題を解くためには、各論点ごとの処理方法を正確に身に付け、素早く仕訳を切れるようにする必要がある。このためには、基本テキストの内容をしっかりと確認し、該当するトレーニング（各回の講義内容に該当する個別問題を収録したもの）の問題を繰り返し解くことが大切になる。



テーマ 3

9月入学コースの紹介

1 基礎マスター＋上級コース

基礎マスター＋上級コースでは、年内において本試験で最も重要な基本項目を年内で習得します。また、1月からは、上級講義で基本項目の再確認と応用論点の習得を行うとともに、上級演習でインプットした知識の習熟度の確認と解答テクニックを学び、答案作成力を高めていきます。年内・年明け・直前期と3回転させることで、より一層知識の定着を図ることができます。

9月	1月	5月	7月
基礎期	応用期	直前期	
<使用教材> ・基本テキスト ・理論テキスト ・トレーニング ・ポイントチェック ・ミニ・実力テスト	<使用教材> ・上級テキスト ・理論テキスト ・トレーニング ・ポイントチェック ・上級演習	<使用教材> ・直前対策テキスト ・答練 ・全国公開模試	
インプット中心	アウトプット中心	アウトプット中心	

<具体的カリキュラム>

基礎期 (9～12月)	講義にて本試験で最も重要な基本論点のインプットを行い、定期的に行う「実力テスト」を通じて適宜インプットした知識の習熟度をチェックする。
応用期 (1～4月)	「上級講義」で基本項目の再確認と応用論点のインプットを行う。また、ほぼ毎週実施する「上級演習」でアウトプットトレーニングを行い、解答テクニックなどを身につける。
直前期 (5～7月)	「直前対策講義」では、税制改正や特殊論点の対策を行いつつ、基礎期・応用期でインプットした知識の総まとめも行う。また、相続は毎週、消費は隔週実施する「答練」で本試験レベルの演習を行い、本試験に向けて答案作成力に磨きをかける。